

『どうしても頑張れない子どもたち』

令和3年9月6日（月）午後3時30分～午後4時50分

立命館大学 産業社会学部 大学院 人間科学研究科

教授 宮口 幸治 氏



「子どもたちが変わると、日本の将来も変わる。」学校関係者である私たちに課せられた責任と使命を、励ましの言葉とともに教えていただきました。また、“頑張っていない”、“怠けている”ように見えてしまう、“頑張れない子どもたち”にどう向き合うのか、学校で困っている子どもたちへの支援方法についてもお話を伺いました。

1 少年院の子どもたち

一般的に、「認知」は五感を通して情報を仕入れ、その情報を基に計画を立て、結果を出す。しかし、入ってくる情報からすでに歪んでいる場合、従来の教育のように心理・社会的アプローチの仕方（考え方、感じ方の修正）だけをいくら支援しても効果があるとはいえない。こちらが伝えたいことが伝わらない、そもそも教育を受ける土台ができていない人が多くいる現状の中で、情報が正しく伝わるように治すことが、再非行防止にもつながる。「コグトレ（Cognitive Enhancement Training）」は、もともとは非行少年を再非行させないためのプログラムである。

2 コグトレ

みる・きく・想像するための認知機能強化トレーニングであり、学習の土台を築き、困っている子どもができないことを、できるようにすることが目的（意義）である。認知機能のすべての範囲（みる力、きく力、記憶力、注意力、想像力）を体系的に網羅している。やればできる可能性がある子どもにやらせないのは、大人が障害を作り出していることにもなり得る。子どもの可能性を勝手に大人が判断するのはよくない。また、支援者のみの視点による支援にも注意しなければならない。

3 知的障害と境界知能

学校で困っている子どもたちの中で、おそらくかなりの割合を境界知能の子どもが占めている。知的障害でなければ問題ないと捉えがちだが、35人学級で5人程度、気付かれない境界知能の子どもたちがいる。そういう眼差しで学校関係者は支援していく必要がある。学校にいる間は教職員の眼があるが、社会に出たら忘れられてしまう。そういった子どもたちが、社会に出るまでに学校でいかに支援するかが大切であり、学校でしか子どもたちを救うことができない。そういった意味で、学校関係者には大きな意義と使命が課されている。

4 困っている子どもの特徴

- (1) 認知機能の弱さ（みる力、きく力、見えないものを想像する力が弱い）
- (2) 感情統制の弱さ（心の中で何が起きているのかわからない、感情の未分化）
- (3) 融通の利かなさ（思考が固い、より多くの選択肢がもてず問題解決力が弱い）
- (4) 不適切な自己認知（自分を正しく評価できない、自分の問題点がわからない）
- (5) 対人スキルの乏しさ（適切な対人認知ができない、会話についていけない）

これらに加え、自分の体の動きが予測できない、不器用さ（運動が苦手、物をよく壊す、力加減が苦手など）がある。

5 まとめ

3方向（社会面、認知面、身体面）から子どもを理解し、包括的な支援が必要である。「みんなと同じようになりたい！」という子どもの思いが大切であり、多様性はその先にあるものである。みんなと同じになっていないのに多様性というのは、子どもを傷つけることに繋がりがねない。また、性の問題行動への早期教育も合わせて考えていく必要がある。